

意見書

- 今後の舞鶴市立図書館のあり方について
- 付議事項

第1期舞鶴市図書館協議会
令和2年2月

第1期 舞鶴市図書館協議会 意見書

【意見書の位置付け】

今回の意見書は、現在、舞鶴市図書館の課題になっていることや、今は実行困難でも将来的には実行すべきと考えられることに焦点をあてて、図書館協議会委員の意見をまとめたものです。一般的に新図書館建設等の際に作成される図書館基本計画のように、実行するサービスを網羅的に記載するものとは区別しています。また、将来の施設の在り方によって、実行可能な範囲も異なってきます。

主な内容

1 今後の図書館のあり方について

● 図書館が地域の中で担う役割及び地域にあったサービス

- ① 情報提供サービス
- ② 課題解決支援と図書館の本来の使命
- ③ 子どものための読書支援
- ④ まちづくり・コミュニティの中心など新たな機能
- ⑤ 学校図書館等との連携
- ⑥ 市民との協働の場
- ⑦ 図書館事業評価（アンケート、社会調査など）

2 付議事項

- 老朽化する東・西図書館の将来的な方向性
- 京都府北部連携都市圏での図書館連携の可能性
- 図書を選書基準・購入のあり方

1 今後の図書館のあり方について

● 図書館が地域の中で担う役割 及び 地域にあったサービス

① 情報提供サービス

【現状と課題】

1. 舞鶴市図書館の利用者については、小説などの一部読書愛好家や、旅行ガイドなど趣味・娯楽雑誌などの利用が大半を占めている。
2. 図書館の実利用者約 12,000 人、人口の約 14%に過ぎず、少ない実利用者が繰り返し利用している状況にある。
3. 仕事関連の専門書を探すときは、図書館に行っても古い本しかないので、京都市内の大型書店に行くという意見もあり、仕事や市民生活に役立つ本や専門的な本が少なく、幅広い市民層の需要に応えられていないのではないかと。
4. 中学生以上の青少年と働き盛りの世代の利用が極端に低い。
5. 一般的に図書館利用者層には、近くに住む（移動距離 20 分以内）子どもやその母親、高齢者の A 層と、遠くても利用する働き盛り世代で高度な情報やレファレンスを求める B 層に分かれるという統計がある。舞鶴の場合、東・西館があるため A 層の利用は比較的多いが、専門書など高度な情報が少ないため、B 層の利用が少ない。
6. インターネットなど図書以外の情報環境が整っていない。

【地域の中で担う役割】

1. 一部の市民層ではなく、多様な市民層に利用してもらえる図書館、また市民生活や地域の課題解決を支援できる市民に役に立つ図書館を目指す。そのためには、趣味や娯楽などに偏ることなく、仕事や市民生活に役立つ本や専門的な本、各年齢層が必要とする本など、1冊当たりの利用は少なくとも、価値のある多様な本や情報を提供する必要がある。
2. 地方にこそ、幅広い分野の図書に加え、インターネットやデータベースなどの情報を集積した質の高い情報環境を整えた図書館が必要。これからは ICT やコワーキングで仕事をする時代になる。質の高い情報環境があれば、田舎にいても多様な仕事が可能になる。若者が新規起業できるような、最先端情報を備えた舞鶴モデルの図書館を考えていくべきである。（舞鶴版 Society5.0 や SDGs [持続可能な開発目標]にも貢献できるような図書館）

※ 舞鶴版 Society5.0・・・AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）などの先端技術導入やエネルギーの地産地消をはじめとした持続可能なまちづくり

3. Iターン、Uターンなど若者をはじめ様々な人が、山あり海ありの自然環境の良

い舞鶴に来る。これらの人に長く住み続けてもらったり、より多くの人に来てもらったりするには、都会と同じ情報環境が必要である。田舎に住んだら都会との縁が切れるのではなく、あらゆる所とつながっていること大切だ。そういう意味でも、図書館が専門的で高度な情報も含めた、幅広い情報を市民へ提供することが今後ますます重要になる。

【地域にあったサービスの目標】

1. 実利用者数（人口の約14%）の増加を図る。
2. 小説や趣味・娯楽の図書と、地域や市民の課題解決に役立つ図書や専門書の購入比率を見直すなど、収集方針や選書について整理するとともに、地域の実態に即した図書資料費を検討する。
3. 市民一人当たりの貸出冊数が多いところは、年齢での利用の差があまりなく、働き盛りの人たちの利用も多い。舞鶴の市民一人当たりの貸出冊数4.4冊を全国平均の5.4冊を上回るように、また京都府北部で最も高い8.1冊をひとつの指標にする。
4. 舞鶴市の延貸出冊数は37万冊。本市と同規模人口の都市でも多い所は、東松山市67万冊、君津市80万冊、大府市138万冊で、図書資料費が多いとそれに比例して利用が多くなり、参考とすべきである。
5. 蔵書中の開架図書数は30万冊を上回ると一挙に利用者が増加する傾向があり、一つの指標になる。
6. インターネットやデータベース、電子情報など図書以外の情報の充実を図る。

②課題解決支援と図書館本来の使命

【現状と課題】

1. 全国的には2000年代以降、小説や趣味、娯楽色の強い図書館から市民の生活や仕事などの課題を解決し、市民の自立を支援する課題解決支援型の図書館に転換する動きが現れ、近年増加しているが、本市図書館ではまだこのような考えは取り入れられていない。本来の図書館の役割や使命とは何かを、明確にして図書館運営を行うべきではないか。
2. 主に仕事についている働き盛りの世代の人たちの利用が非常に少ない。この人たちを図書館にどう呼ぶかが舞鶴の課題である。
3. 高齢者世代が増加するなか、健康に課題を抱える人がいる一方、元気な人で地域活動など幅を広げる人もいる。健康課題への支援とともに、元気な高齢者の社会参加支援も行っていく必要がある。

【地域の中で担う役割】

1. 図書館は単なる公の無料貸本屋ではなく、市民の生活や仕事などの課題を解決し、市民の自立を支援するための地域社会必須の知的インフラ・情報拠点である。
2. これからは市民自身がまちづくりや政策づくりに参加し、新たな公共の担い手となり、民主主義社会を維持しつづけることが求められてきている。また、地方分権の時代には、地方自治体自身で課題を解決していく必要があり、行政職員等が

過不足のない情報や資料を入手する必要がある。図書館はそのために必要な客観的な情報を市民や行政職員などに提供する機関である。

3. 小説や趣味、娯楽色の強い図書館から、社会に向き合う人や地域に貢献しようとする人を支援する役割を担う図書館へ変わっていく必要がある。
4. 働き盛りの人たちは仕事や家庭、地域などで様々な課題に直面することも多い。図書館はこれらの課題解決を支援するため、様々な情報を提供するとともに、相談に応じたり、専門機関の紹介を行ったりすることが求められる。

【地域にあったサービス】

1. 課題解決コーナーの設置
 - ビジネス支援や、行政情報・医療健康情報などの提供
(行政情報については、ハザードマップ、パブリックコメント資料、議会議事録などの情報は必須)
 - 専門的な図書や情報の収集
2. 「何でも相談コーナー」(レファレンス業務)の充実
 - 司書は利用者が必要な情報を入手するためのアドバイザーの役割を果たす
※ レファレンスコーナーではなく、「何でも相談コーナー」などわかりやすい工夫も必要
3. 図書資料などの情報の案内だけでなく、専門家や専門機関との連携や紹介も行う。
 - 例えば、農協や農業試験場など中央の機関とも連携をし、東京や大阪に行かなくても情報が入手できるようにする。
4. データベースやインターネットコーナーの設置
広域圏や市ばかりでなく、小学校区単位など地域コミュニティ段階での実態がわかるデータや地域に役立つデータを提供し、まちづくりやコミュニティの形成に役立てる。
5. 課題解決に関連する講演会や催しの実施をする
 - 起業セミナー、農業相談会、健康講座などの開催

③子どものための読書支援

【現状と課題】

1. 現在、赤ちゃんおはなし会や人形劇、エプロンシアターなど小学生以下を対象とした多彩な催しや、学校との連携によるブックトークを実施するなど充実している。その効果は児童の貸出冊数の多さとなって現れている。
2. しかし、小学生以下の登録率は低く、限られた範囲の児童が繰り返し利用していることが推測される。小学生以下についても家庭環境などに関わらず、実利用者を増やす対策が必要である。
3. 小学生の高学年以上になると図書の貸出が大きく減少し、さらに「おはなし会」などの催しは参加者も減少する。話を聞くだけではなく、子どもたちが自主的、能動的に取り組める催しが必要ではないか。
4. 母子・父子家庭や低所得家庭、外国人家庭、病弱児、遠隔地に住む児童、不登校児童など支援を必要とする子どもたちもいる。児童館のようにいろんな環境

におかれている子どもが集まれる敷居の低い図書館にできないか。格差是正のための役割もある。

【地域の中で担う役割】

1. 親子で絵本に親しむきっかけを作る赤ちゃんおはなし会など、さまざまな催しを開催し、生涯にわたる人格形成の基礎を培う手助けをする。
2. 次代を担う子どもたちが、読書を通じて豊かな情操を育み、幅広く正確な知識を習得できるよう支援する。
3. 自ら課題を見だし、解決するための情報を探し、まとめることができる情報リテラシーの能力や、コンピューターやAIなどの知識が必要とされる時代になっている。今後は図書館の利用が非常に少ない小学生高学年、中学生以上を対象とした、これからの時代に応じた取り組みが重要である。
4. さまざまな困難な環境におかれている子どもたちが利用しやすく、それぞれが抱える課題の解決支援につながるようにしていく。

【地域にあったサービス】

1. 乳幼児から小学生中学年までの読書推進のための催しの実施
 - ▶ 「赤ちゃんおはなし会」(図書館に来てもらう催し・インリーチ事業)の実施
 - ▶ 幼児から小学生低学年を対象とした「おはなし会」等の催しの実施
 - ▶ 新規:ブックスタート(図書館から出かけていく催し・アウトリーチ事業)の効果と実施の検討。本を配るだけでなく、いかに図書館利用につなげていくかが大切である。(実績がどれくらい上がっているかの検証が必要)
2. 小学生高学年、中学生以上を対象とした、自ら課題を設定し、必要な情報を探し出し解決する力を身につける催しの実施(情報リテラシー能力の向上)
 - ▶ 新規:図書館を使った調べ学習や科学講座などの実施

④まちづくり・コミュニティの中心など新たな機能

【現状と課題】

1. 近年の図書館は、従来の情報提供機能に加え、まちづくりやコンパクトシティなどの中心的施設として、あらゆる世代の市民が様々な目的で集う、斬新で洗練された空間づくりが行われている。
2. 本市図書館は、東・西図書館とも市街地の端に位置しており、まちづくりの拠点としての機能はもっていない。
3. また閲覧席数が少なく、児童のための読み聞かせコーナーと大人の読書コーナーが近接しており、館内が手狭でゆったりした空間にはなっていない。

【地域の中で担う役割】

1. 本市図書館においても、図書館が様々な目的を持つ市民の交流の場、コミュニケーションの場、ボランティアの一つの拠点となることが望まれる。大人から子どもまで、多彩な催しや交流、勉強、仕事に対応できる空間が将来的に必要な

である。

【地域にあったサービス】

1. 大人向けの読書推進事業の充実（市民交流やコミュニケーションの場を広げる）
 - ▶ 読書会の実施
 - ▶ 新規：本の著者等によるブックトークや講演会の開催
 - ▶ 新規：課題解決コーナーに応じた多彩な催しの開催
2. 新たなコンセプトや機能をもつ図書館へ
 - ▶ 課題解決支援型図書館として、ビジネス支援や法務情報支援、行政情報支援などのコーナーを設置
 - ▶ 地域の情報センターとしての機能
 - ▶ まちづくりの拠点としての機能（コンパクトシティの一つの拠点、商業施設や公的な施設との複合施設化など）
 - ▶ 市民交流施設としての機能（滞在型図書館・目的の異なる市民の居場所）
 - ▶ 建築空間の質の高い図書館（若者から高齢者まで多くの人をひきつける場）
3. 市民のための新たな空間づくりの検討
 - ▶ 課題解決窓口、調査研究コーナー
 - ▶ 軽読書コーナー（閲覧室各所）、スタディルーム（静かな空間）、グループ学習室（自由に会話ができる空間）、セカンドオフィスコーナー（パソコンの持ち込みにも対応）
 - ▶ 子どもの読み聞かせコーナー（自由に声に出して読み聞かせできたり、子ども同士が遊んだり、親同士が交流できたりする広い空間）
 - ▶ 研修室、ボランティアルーム（人形劇やパネルシアター、照明などの各種機材の保管場所も確保）
 - ▶ 市民交流スペース（自由に会話できる空間、ホールなど）、飲食コーナー
 - ※ 近年の図書館は、ガラス張りで透明性の高い空間、ラーニング・コモンズのような空間を取り入れる事例が増えている。

⑤ 学校図書館等との連携

【現状と課題】

1. 小学校を対象にしたブックトークや遠距離にある小学校への貸出文庫などを実施。また小学校教育研究会図書館部会との交流も行っている。

【地域の中で担う役割】

1. 交通弱者である児童や生徒にとっては、日常的に市立図書館を利用することは困難な場合が多く、児童生徒が日常的に滞在する学校図書館とのさらなる連携が必要である。
2. 市立図書館は、学校図書館や図書館ボランティアとネットワークを作り、連携の中心的な役割を担っていく必要がある。また司書資格をもつボランティアの活動の場を広げる。

【地域にあったサービス】

1. 学校図書館との連携の拡大
 - ブックトークの実施
 - 貸出文庫：図書館から遠距離にある小学校、支援学校を対象に行う
 - 団体貸出：学校クラス単位で貸出を行う
 - 新規：図書の学校図書館連携支援セットを作り、市内全小・中学校に貸出を行う（調べ学習に使用する本などをテーマごとにセットし貸し出す）
 - 新規：司書教諭等担当者と研修会などを通じて連携を行う。
2. 市内の機関等との連携（レファンレンス、図書の貸出）
 - 舞鶴市郷土資料館や舞鶴市田辺城資料館など
 - 市役所各課や市内の各種団体など

⑥市民との協働の場

【現状と課題】

1. 現在のボランティアの活動状況
 - 市立図書館・・・3団体が、絵本の読み聞かせや人形劇などを実施
 - 学校図書館・・・14の小学校で15のボランティアグループが活動
2. 地域には司書の資格を持つ人や、ボランティア活動に興味がある人も多いのではないかと。地域の貴重な人材を有効に活用していくことが大切である。
3. ボランティアの在り方として、単なる行政の下請けではなく、プロデューサー型やコーディネーター型、介助型など多様なボランティアが必要である。
4. 市立図書館や学校図書館でのさらなるボランティアの充実が必要である。
5. 第三者機関である図書館協議会を設置し、市民の目線から図書館を見直している。

【地域の中で担う役割】

1. ボランティアや図書館協議会委員として、図書館の催しや運営に参加してもらうことにより、市民の意見を活かすとともに、市民と連携して図書館運営を進める。
2. 市民参画を促すとともに地域の人材を活かすため、市立図書館や学校図書館のためのボランティア養成講座を定期的に行う必要がある。
3. 図書館内の催しの手伝いに終始するのではなく、ボランティアと図書館が一緒になって地域の人々のバックアップをするという視点からボランティアを考えることが大切である。

【地域にあったサービス】

1. 現在、行われているボランティア活動の充実
 - ボランティア養成講座を実施するとともに、講座修了者に対してレベルアップのための研修会を定期的に行う
 - 中高生のボランティア参加を促進する
 - ・子どもによる子どものための読み聞かせ
2. 新たなボランティアの導入
 - ※ 他の自治体の例：インキュベーション・リーダーのような何かの分野に詳

しい人にボランティアで来てもらって、市民がその人に色々聞くことができる交流の場を設ける。お互いに教え合う、支え合う場を図書館が提供し、地域の人をバックアップしていく。

⑦ 図書館事業評価（アンケートなど）

【現状と課題】

1. 図書館の事業について、図書館協議会による第三者の評価をさらに取り入れる必要がある。
2. 評価システムは、例えば貸出冊数について単に量が多ければよいのか、量だけでなく質を測定できるものにするべきである。

【地域の中で担う役割】

1. 図書館を普段利用する人や、逆に図書館をほとんど利用しない人、或いは専門家など多様な人から意見をいただくことにより、図書館事業を評価し、より多くの市民層に役立つ図書館に常に改善していく。

【地域にあったサービス】

1. 図書館協議会を開催し、専門家や教育関係者、市民の意見を取り入れる。
2. 図書館の利用に関する社会調査やアンケートを実施し、図書館の各種サービス事業のあり方を検討する。

2 付議事項

① 老朽化する東・西図書館の将来的な方向性

- 別紙1のとおり。（9ページ以降に添付）

② 京都府北部連携都市圏での図書館連携の可能性

- 京都府北部5市2町での広域貸出については実現し、圏域内の住民はどこの図書館でも貸出が可能になっているが、より利便性を向上させるため、今後とも圏域内の図書館と検討を重ねることが必要である。
- 人口が減り続けるなか、北部で一つの図書館として機能する考えは大切。それぞれの自治体の図書館が分館としての役割を担う。図書購入の重複を避け、高度な専門的な本は分担を決めて購入する。これには、貸出や返却本を圏域内で回遊させる物流が必要である。

③ 図書の選書基準・購入のあり方

- 選書のあり方として、要求課題としてのポピュラーな本だけでなく、地域社会の必要課題に対応した幅広い分野の本の選書が必要。社会調査したうえで、地域や市民生活でどのような課題があるのか、司書が課題を把握して行われるべきである。

老朽化する東・西図書館の将来的な方向性

1. 施設の現状と課題

- ① 東・西図書館新築から約 30 年経過し、経年劣化により、修繕工事にも多額の費用がかかるようになっており、施設の将来的な方向性を検討すべき時期に来ている。
- ② その際、少子高齢化や、人口減少、厳しい財政状況、「公共施設再生基本計画」などにより公共施設の総延べ床面積の抑制、さらに、舞鶴版コンパクトシティなどについても十分勘案する必要がある。
- ③ 将来の方向性として大きく分けて、本館 1 館を新設する選択肢と、現在の東西図書館 2 館体制のまま改修を重ねていく選択肢がある。

2. 新・本館 1 館体制 と 現・東西 2 館体制の比較

11 ページの比較表のとおり。

- ① 人件費などの運営コストは 1 館体制の方が安価になる。
- ② 新築工事費や改修工事費は、現状 2 館体制が安価ではあるが、いずれは建て替えが必要になる。
- ③ 利便性に関し図書資料については、1 館体制の方が幅広い分野の、様々なレベルの図書資料を多く置くことができる
- ④ 新たな図書館機能については、新築する方が、課題解決支援コーナーやまちづくりの拠点としての機能などを持った質の高い空間を持った図書館が可能になる。
- ⑤ 課題解決支援など専門的なレファレンスを行うには 1 館に情報をまとめて置く方が効率的で高度な対応が可能である。
- ⑥ 図書館までの距離は、1 館体制であっても分館を置けば 2 館体制と同じである。
- ⑦ 新たに新築する方が、駅やバス停など公共交通にも配慮した舞鶴版コンパクトシティに基づいたまちづくりの拠点機能を持たせやすい。

3. 図書館施設の将来的な方向性

【主な意見】

- ① 今は東・西図書館が同じことをやっており、力が 2 分している。一つに集約して、そこから図書館情報を発信するとともに、地域課題や市民の生活上の課題に対応できるよう、行政と連携し、そのあたりの情報も発信してほしい。そのうえで、地域に密着した分館があればよい。
- ② 舞鶴市は東と西では性格が違う、歴史が違うということに捉われすぎて、東西のバランス重視で非効率になってきた面がある。しかし、これからはコンパクトシティの時代である。何を削って何に使うかが、重要になってくる。そのなかで図書館はまちづくりや人づくりにも寄与できるので、投資してもらえる可能性がある。図書館の配置、あり方は地理的な問題だけでなく、そこに来てくださる方々のことを考えるのが大事だ。本館が非常に高度な機能を持っていることは当然で、地域館としての分館は、地域と密着した形であることが望ましい。

- ③ いろんな情報が入る図書館、地域の情報発信の中心になってほしい。
- ④ 課題解決や専門的な本なども入れようとする、大きな本館があったほうがよい。子どもは遠い図書館までは行けない。身近な分館があったほうがよい。
- ⑤ 開架図書30万冊を超えるような大きな本館があればよい。本館は課題解決や、学校との連携など専門性を持った図書館にする。地域課題に対応するには地域性をもった分館が必要である。
- ⑥ いろんな機能を持ち、いろんな人が集まれる本館が交通の便利な場所に必要。子どもや高齢者には身近なところで本が手に取れるよう分館も必要である。
- ⑦ 大きな本館については、それを活用するだけのニーズというか、若者や働き手、それが舞鶴で担保できるのか、それとも大きな本館をつくることでそこを担保していくのか、そのあたりの検討も必要ではないか。
- ⑧ 市民が気軽に本に親しむという点では、これまでの東西2館と3分館を持つ体制でよかったが、設置後30年で制度や技術水準が大きく変化し、情報も高度化してきている。Society5.0など新時代に即した建物、蔵書ともに規模の大きい本館を設置したうえで、小規模でもよいので便利な立地に分館を持つのがよい。
- ⑨ 東・西図書館が1カ所に統合された場合、図書館まで遠距離になり、児童や高齢者の利用は減少すると思う。仮に本館1館にする場合でも、東西どちらかに分館を置くべきである。
- ⑩ 面積の広い自治体では分館が必要である。また本市の場合、本館や分館、公民館図書室の配置についても地理的に重なりすぎていたり、逆に周辺部では希薄になっていたりしており、システム全体の見直しが必要ではないか。一般的に移動時間20分前後までは市民が図書館に行きたいと思う距離。それを目安に魅力的な本館、分館を配置すれば、舞鶴の場合かなりの部分は人を呼べる範囲になると思う。
- ⑪ 現在の分館の規模は蔵書が7000冊から1万冊であり、一般的な分館と比較すると小さい。
- ⑫ 第1期目の協議会では、主に先進的な図書館や高いレベルの図書館についてのデータの分析を行ったが、人口や面積、財政状況などが同規模の自治体や同じようなレベルの図書館の状況も分析し、客観的にみていく必要がある。

【結論】

現在は、東・西図書館が同じことをやっており、力が2分している。将来的には、小説や趣味、娯楽が中心の、似たような内容の図書館を二つ持つのではなく、より幅広い分野の図書を初心者向けから専門的なレベルまで収集し、幅広い市民層の需要に応えるとともに、地域課題や市民の日常生活上の課題解決支援などの、高度なレファレンス機能を持つ本館を一つ持つことが望ましい。そのうえで、子どもや高齢者が行きやすく身近であり、また地域課題の解決に寄与できる分館が必要である。

また、近年の図書館は、従来の情報提供機能に加え、まちづくりやコンパクトシティなどの中心施設として、あらゆる世代の市民が様々な目的で集う斬新で洗練された空間作りが行われている。将来的に本館を新設する場合は、舞鶴版コンパクトシティに基づいた、まちづくりの拠点となる位置に置くことも可能になる。

新・本館 1 館体制 と 現・東西 2 館体制の比較表

	新・本館 1 館体制	現・東西 2 館体制
運営コスト (人件費など)	安価。 1館がまとめて業務を行うことができ、効率的である。	高価。 同じ業務を 2 重に行うことが多くなり、非効率である。
新築、改修工事費	高価。 建物を新築する必要がある。	安価。 今後老朽化に伴う高額な改修工事の費用が発生する。またいずれは建替えが必要。再生実施計画は第 3 期(R18～R27)。
利便性 ①図書資料	優。 幅広い分野の本や初歩的な本から専門的な本、様々なレベルの本を置くことができる。専門性に優れた本館と利用の多い小説などを中心とした分館に機能を分けることができる。	劣。 蔵書が 2 館に分散する。似たような内容や同じようなレベルの本を平等に置くことになり、多様性がなくなる。2 館平等に人気小説や流行本が多くなり、結果的に専門書等が少なくなる。
利便性 ②新たな図書館機能(ハード面)	優。 新築することにより、課題解決支援コーナーや、まちづくりの拠点としての機能、地域の情報センターとしての機能などをもった質の高い空間を持った図書館づくりが可能。	劣。 現在の施設は、手狭になっており、新たなコーナーや機能を付加することは困難である。
利便性 ③新たな図書館機能(ソフト面)	優。 課題解決支援や地域情報に関する幅広く、専門的なレファレンスを行うには 1 館に情報をまとめて置く方が効率的で高度な対応ができる。また 1 館で集中して行うことにより、職員のレファレンス能力の向上につながる。	劣。 専門性の高い複数のコーナーを 2 館に分散または並置することは、情報が分散するとともに、内容・レベルが似た情報を東西平等に置くことになり、多様性が無くなる。
利便性 ④距離	等。 本館 1 館になると、距離は遠くなる市民が増加するが、図書館システムが連動した分館を設置すれば、現状を維持できる。	等。 2 館ということで、身近で比較的行きやすい距離にある。現状の距離のまま、変更はない。
まちづくりの拠点	優。 駅やバス停の近くなど公共交通にも配慮するとともに、舞鶴版コンパクトシティに基づいたまちづくりの拠点となる位置に新設することも可能。	劣。 東西図書館とも市街化区域の端部にあり、まちづくりの拠点とするのは困難である。